

努力

東部小・6 野崎 菜々羽

シーンとした空気の中

「いちについてー」

張った声が運動場全体にひびきわたった。このしゅん間が大きい。できることなら今すぐにでもこの場からにげ出したい。きん張とあせりでこ動がだんだん速くなる。そんな中、

「パンツ。」

とスタートの合図がなった。みんないっせいに走り出す。置いていかれないようにと私はただ前の子の背中だけを見て走った。五年生のマラソン大会。走るきよりは、千二百メートル。私は走るの得意なほうだ。走るのは好きだし、気持ちが良い。けれどマラソン大会は別。走ること自体は楽しいのだが順位がある。それがマラソン大会をあまり好んでいない大きな理由だった。結果は六位。くやしい。けれど、なみだが出てくるほどではなかった。

さかのぼること一年前。四年生のとき。マラソン大会に向けてたくさん練習していた。無事に試走会をむかえ、一位を取ることができた。だが、試走会の後、かぜをひいてしまった。数日で治ったが病み上がりの状態で本番をむかえた。いつものように、

「いちについてー、パンツ。」

みんないっせいに飛び出した。が、だれも先頭には出ていかない。結局私が女子の先頭に出た。不運なことに風が強い。そして向かい

風。病み上がりというのもあつてきつかった。そのままずっと私が先頭で走り、もうすぐラストスパートをかけようとするところで、

「○○ちゃんがんばれ！」

と声えんが聞こえた。そのとき私の後ろを走っていた子達の名前だ。その子達の名前しか聞こえない。私のことを応援してくれる人もいただろう。でも、その声は届かなかった。私はなんだか泣きそうになった。まるで自分のことなかだれも応えんしていないみたいで。そのとき、心が折れかけた。でもがんばらなくてはいいけない。

ラストスパートをかけようと決めていた場所がきた。私は走るペースを上げるはずだった。だけど、上げられなかった。体力の限界が近かったのだろう。その一方、後ろにぴたりくつついていた二人が一気にペースを上げて私を追いぬいた。そしてどんどんきよりをはなしていく。私は心が完全に折れた。足が重い。でもなんとか走りきり、ゴールした。結果は三位。いろいろな気持ちがこみ上げてきた。悲しい、くやしい……。多くはマイナスな気持ち。なんで。これまではマラソン大会がきらいという訳ではなかったのに。だって走るのは、好きなんだから。

三年生までは、一位を取れていた。練習をたくさんして、本番はどきどきしていてやる気に満ちていた。走ることが楽しくて練習が結果につながったと思うと本当にうれしかった。

だからこれまでの結果を思い出すと、余計にくやしくなって泣いた。あまり人前で泣きたくない。泣きやめよ、と思ったが私の体は言うことを聞いてくれなかった。

五年生は四年生のときみたいに泣かなかった。今までで一番低い順位を取ったのに。もちろんくやしい。けれど泣けるほどのくやし

さではない。なぜだろう。そう考えていると、以前先生が教えてくれたことを思い出した。たくさん努力した分、結果によつてすごくうれしい、くやしいのどちらかになる。これの裏を返せば、努力をしなかったらそこまでうれしくない、くやしくないになると思う。私はこれだと思った。確かにこれまでと比べたら練習をしていない。その理由は足を少し痛めてしまったからだと思う。

足を痛めているあいだ、私はあせっていた。自分が練習していないあいだに周りの子はきつと速くなっている。そう思うとあせるのだ。あせりながらも結局走れなかった。やがて走れるようになったころ、かけ足運動が始まった。実際に走ってみると周りの子が速くなっているのに対して、自分は少しおそくなっている気がした。

そして本番をむかえた。なんだかぼーっとしていた。何も考えないで走り、いつの間にかゴールした。全体的にぼーっとしていたのは、そんなに練習していないし、もう……。と少しあきらめがあったからだと思う。結局気持ち次第なのかもしれない。

そして今年は六年生。小学校最後のマラソン大会がある。当日かぜを引かないように。けがをしないように。なにより、くいのない結果が出せるように。できることは努力。だから練習する。結果によつてはすごく、くやしい思いをするかもしれない。けれど努力することではかわえないものが味わえるだろう。それを私は味わいたい。だから今日も努力する。